

◆【海員随想】はるかなる南氷洋④ 谷頭正仁

— 日新丸、第2日新丸、第3日新丸 —

士官、部員という形、現在の混乗船においても、三航士と甲板長に給与は同じと思えば間違いありません。ライセンスの重みでしょうか。給与、歩合金、ボーナス、いずれも歴史的な性質を持つものと思っています。歩合金、仲積手当はその額とともに配分の方法もいろいろと変わったようで、日本人と外国人に分け、一律となっていきました。一航士の説明が事前に不十分でもめたことが1件ありましたが、日本人分と外国人分をどう分けるかが問題だろうと思いました。

この時代の歩合金、仲積手当は海員組合も入ってまとめたものであり、配分も同じです。古き良き時代を引きずった歩合金、仲積手当でしょうか。

南氷洋で嫌なのは時化、低気圧、風、うねり、何ともいえません。各捕鯨母船に気象班を乗せていましたが、予報はできてもどうすることもできません。じっと我慢の日々です。

3月に入ると操業終了が近づきます。この日のこと、船団長だけではなく、船団員全員が待っています。「切揚祝」という飲み会が行われていました。祝酒1合が出て、三航士は酒1本を持って甲板部食堂へ行くわけです。不出来を詫びることになりますが、これほど苦い酒もないのかもしれませんが、何人かが「三航士はそれなりに頑張ったのだから」といってくれましたが、明洋丸の切揚祝については記憶がありません。「第18次南」の明洋丸は4月、下関に入港し、夕方着岸しました。

船長のことは、詩にして組合機関誌「海員」に載せてもらいました。今や「はるかなり南氷洋」です。

昭和30年代のことです。新任の三航士、三機士はいびられました。自分があまりいびられなかったのは、最初の船の一航士がKさんだったからだと思います。明洋丸の一航士、Yさんにも大変かばってもらいました。